２０２２年１１月２０日（降臨節前主日、特定２９、C年）
牧師メッセージ
「十字架に即位する王」
（ルカによる福音書23:35-43）

司祭ヨセフ太田信三

今日は教会暦の最後の主日です。この主日は「王なるキリストの主日」と言われます。「王なるキリスト」の主日は、1925年にローマ・カトリックにて定められたものです。1925年はヒットラー、ムッソリーニ、スターリンが独裁体制を固めていった時代です。そのような世の動きの中で、キリストこそがまことの王なのだ、と望み、今が世の終わりのように思えるかもしれないけれど、王であるキリストが再び来てくださる喜びの時こそが終わりの時なのだと、祝ったのです。今日の福音はまさに、まことの王、王なるキリストの姿が示されています。

三つの十字架の真ん中は主イエス、両脇はいずれも死刑囚です。片方の囚人は「自分自身と我々を救ってみろ」とののしりつつも、救いを懇願します。しかし、十字架から降りられない男がメシアであるとは信じられず、結局はあざ笑い、バカにし、冒涜します。さて、もう片側の囚人は、「あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と、言うなれば十字架上の主イエスへ信仰告白します。

人々にしてみれば、無力にも十字架から降りてこないことこそ、イエスが「メシア」でも、「ユダヤ人の王」でもないことの何よりの証しです。しかし主イエスは、十字架から降りないのです。なぜなら、王なるキリストは十字架に即位したからです。玉座ではなく、十字架に即位するとは、この世界でもっとも悲惨で、救いようのない現実を生きる人と共におられる王となるためでした。最低最悪の罪を犯した人間であっても、主イエスは同じ罪人となり、その命を楽園へと招きます。すべての人の幸いを心底願い、もっとも苦しい人間をこそ、自らの命を差し出してまでも救うのが、王なるキリストです。これこそがまことの王なのです。

十字架上のイエス。わたしたちは、この男をどのように見つめているでしょうか。十字架から降りられないイエスを笑うのか。それとも、十字架から降りないからこそイエスはメシアであり、十字架こそイエスがメシアである印であると信じるのか。わたしたちは、どう十字架を見つめているでしょうか。

自らの十字架への眼差しを顧みつつ、あらためて「王なるキリスト」を崇め、新しい暦へと歩み出します。そして備えのときである降臨節、心耕され、まことの王のご降誕を心から喜ぶことができますように。